



TITLE:

第50回生物物理若手の会夏の学校 (研究会報告)

AUTHOR(S):

CITATION:

第50回生物物理若手の会夏の学校(研究会報告). 物性研究 2011, 95(4-5): 513-514

ISSUE DATE:

2011-01-05

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/169403>

RIGHT:

研究会報告

(YITP-W-10-19)

「第50回生物物理若手の会夏の学校」

開催日時： 2010年9月3日-6日
開催場所： 愛知県一宮市尾西グリーンプラザ

[研究会の目的・趣旨]

本研究会は、物理学を学び生命現象の解明を目指す若手研究者を全国から集め、分野横断的な交流を通じた専門知識の共有および研究成果の議論を通じて、生物物理学研究の発展および若手人材の相互成長を行うことを目的としている。

生物物理学会で活躍する様々な分野の研究者を参加者とすることにより、分野横断的な交流の場となることを目指す。近年の生物学は、分子生物学や細胞生物学などに代表されるように、生物を構成する各階層ごとに分かれて多角化しており、各分野において固有の専門知識が存在する。生物物理学という枠組みにはこれらの階層の仕切りがなく、生物物理学会には、様々な階層での研究を行う研究者が参加している。これらの階層の異なる研究者同士が議論を交わすことにより、専門知識の共有が活発に行われると予想する。

また、大学院生を中心とする若手研究者を主な参加者とし、日本全国の様々な研究機関の研究代表者（例：大学教授）を主な講師とすることにより、人材育成の場として高い効果を得ることを目指す。修士課程の大学院生が博士課程における研究の場を探すために、あるいは博士課程の大学院生が博士号取得後の研究の場を探すために、様々な研究機関からの研究発表は非常に有益である。また、研究代表者との接点を得る機会は、若手研究者にとって将来の進路を決定するための重要な礎になる。さらに、生物物理学会員である講師にとって、本研究会は生物物理学会の後輩を育成する場とも見なされる。若手研究者が自立して主体的に研究に取り組み、将来の優秀な研究者へと成長するために、本研究会が重要な基盤になることを期待している。研究会が重要な基盤になることを期待している。

本研究会のテーマは「愛されて50年、これからの50年、DAGANE!!」である。このテーマには、「日本で生物物理が始まって50年経ち、いい機会なので過去を振り返ろう。そして、今後の生物物理がどうなっていくかをみんなで考え、また、今後の生物物理を支えていく人材を育てるために、夏の学校は何ができるだろうか。」という意味が込められている。初日の講演で、日本生物物理学50年の歴史を振り返り、研究者の先輩方から知恵を拝借したいと考えている。2日目以降の講演会では、様々な分野から講師を招聘し、講演していただく予定である。これらの講演会は普段参加者が触れない分野の話を聴講することで、分野横断的な知識の交流が活発になり、人材育成に貢献することを期待したものである。また、閉会講演会では、科学コミュニケーションと、投資効果を意識した予算の使い方に関する講演をしていただく。昨年の事業仕分けにより、世間と我々研究者の意識の溝がはつきりした。これは研究者の説明不足が大きな要因だと考え、今後日本の自然科学を支える存在になるであろう我々若手に、必要な知識だと実行委員会が判断し、このような講演を行うことに決めた。また、参加者による口頭発表、フラッシュトーク、ポスター発表の時間を設ける。研究課題について議論を深める場としてはもちろんのこと、若手研究者のプレゼンテーション能力を育成する場として、若手研究者による発表は重要な意義を持つ。

[研究会の成果]

本研究会では、初日にグループ討論会、二日目に参加者全員によるフラッシュトーク、ポスター発表を行った。これらのセッションは参加者が行っている研究を発表するものである。フラッシュトークは参加者全員が行ったので、どの参加者がどのような研究を行っているか、短時間で把握するのに非常に有効であった。そして、グループ討論会及び、ポスター発表では、参加者同士が直接議論したり、分野横断的な知識の交流に役立った。また、ひとつのタンパク質の研究においてもアプローチはたくさんある。生物物理学では、実験と理論で扱える領域に差があまりなく、実験の手法も多岐に渡るからである。参加者は、これらのセッションで、参加者同士の議論を通して、互いに知識を交換し、新たな知見を得られた。アンケートにも「ロドプシンに関する新たな知識が得られた。(修士課程学生)」という意見があり、本研究会が参加者の新たな知識を得る手助けができたことがわかる。また、こうしてできたつながりは、セッションが終わってからでも活かされ、休憩時間に参加者同士が熱心に議論している様子を会場で散見できた。

二日目に柳田先生が「揺らぎ」というキーワードが生物の包括的な理解にいかに大切か、実験的、理論的な側面から考察する講演を行った。三日目に美宅先生(シミュレーション)、水谷先生(実験)、金子先生(理論)、今井先生(実験)、片平先生(実験)、瀬藤先生(実験)による講演会を行った。プレゼン能力に優れた講師の方々の講演会により、参加者が普段触れない分野でも理解し易く、生物物理学の分野横断的な理解に役立った。

以上の発表や講義の聴講により、「一口に生物物理と言っても、protein、分子等を物理的手法でとらえていく研究や、生命現象や動態を物理学的な思考・解析にもとづいて進めていく研究、等々、様々あると言うことを感じました。(学部生)」や「柳田敏雄先生、金子邦彦先生、瀬藤光利先生の話は特に面白かったです。自分の、研究に対する考え方、生命現象のとらえ方がぐらつきました。(学部生)」といった意見をアンケートから得ている。分野横断的な知識の交流を活発化することに成功し、参加者の生物物理学の理解を助けたと言える。

そして、最終日には、事業仕分けに焦点を当てたセッションを設けた。このセッションでは、我々が研究し続ける基盤を維持するために今後必要な知識を得ることができた。「予算に関する講義が一番おもしろかったです。自分が社会の中で置かれている状況を知ることができ、研究の意義を考える大切さをあらためて確認することができました。(学部生)」という意見をアンケートで得ている。今後日本の科学を背負う若手研究者にいい刺激を与えることができたと考えられる。

最後に、本研究会の改善点としては、参加者自らが発表し、議論する機会をさらに設けるか検討することである。これは、参加者のアンケートから「フラッシュトークの一人の持ち時間を長くして欲しい(学部生)」、「グループ討論会を長くやりたい。(学部生、博士課程学生)」、「ポスター発表を長くして欲しい。(修士課程学生)」等の意見をいただき、参加者が発表の場を渴望しているという背景がある。また、今年度は生化若手の会の夏の学校と日程が重なった。この点は参加者からも指摘を受けた。今後、他の若手夏の学校などと連携をとることも改善点のひとつである。

[世話人]

代表：都築峰幸(名古屋大学理学研究科)
森義治(名古屋大学理学研究科)
浦野諒(名古屋大学工学研究科)
久嶋誠也(名古屋大学工学研究科)
根岸瑠美(東京工業大学総合理工学研究科)
山田浩輔(名古屋大学工学研究科)

副代表：片山耕大(名古屋工業大学工学研究科)
安西高廣(名古屋大学理学研究科)
尾崎聡(名古屋大学工学研究科)
田中康太郎(名古屋大学工学研究科)
山田啓介(名古屋工業大学工学研究科)
山田達矢(名古屋大学工学研究科)